時の話題
Commentary

サラゴサ世界博覧会が問いかけたもの

橋爪 紳也
Written by Shinya Hashizume

マドリッドとバルセロナとの中間に位置するアラゴン州都サラゴサ(Zaragoza)は、65万人が居住するスペイン第5の都市である。2008年6月14日から9月14日までの93日間、この地で国際博覧会が開催された。

主題は「水と持続可能な開発(Water and Sustainable Development)」。人類の生存に欠かせない「水」との新たな関係を構築する必要性を地球規模で考える枠組みを創造することを目的としている。国際博覧会条約に基づく認定博覧会では、2005年日本国際博覧会(愛・地球博)に続き、2010年の上海世界博覧会にバトンを渡すものだ。106の国と企業、NGOなどが参加、140の出展と延べ数約5000ものショーや催しで会場は連日賑わい、来場者数は約560万人(速報値)に達した。

サラゴサは歴史都市として知られている。しかし世界遺産の教会もある旧市街地からエブロ川を挟んだ対岸の地域は、流路が蛇行していることから洪水時には浸水することもあり、低利用のままになっていた。今回の博覧会開催に際して、この河川敷一帯、おおよそ120haを自生植物の保護を図る親水公園として整備する方針が示された。東京ドーム25個を収容できるほど広大なものだ。

この公園に隣接した25haが博覧会の主会場である。人工地盤の上に湾曲した平面が印象的な展示館群を建設、加えて河川敷にも催事場やパビリオンが仮設された。スペイン政府館やコンベンション施設は当初から恒久施設として構想された。展示館はイベント終了後も再利用、業務地区に整備する。会場計画のありようからも、自然環境と開発行為との調和を図ろうとする博覧会の意図を読み取ることができる。

渇水による困難を訴える「乾き」のパビリオン、洪水や津波などの被害を訴える体験シアターなどでは、人類が直面している環境問題を紹介するテーマ展示が展開された。水族館ではニール川、アマゾン川、メコン川、ダーリン川、エブロ川など、各大陸を代表する河川の景観が再現された。なかでも話題になったのが、鉄道駅から会場へのゲートともなるブリッジ・パビリオンである。全長270m、二層の橋梁全体が前衛的なギャラリー空間となっている。英国の建築家ザハ・ハディドが手がけたものだ。

各国の出展も、水資源の大切さや環境技術を訴えることに主眼が置かれていた。「水の巨人」が砂漠を潤す感動的な物語をアニメーションで見せた韓国館、干拓で国土を築く歴史を床と壁面に投影したオランダ館などが印象に残った。芸術的な表現を駆使するフランス館、船型のライドに乗って手堅い展示に徹するドイツ館などは人気を集めていた。環境技術の粋を来館者に見せる点では同じだが、ディスプレイの方法論に国民性が現れる。国際博覧会ならではの楽しみだ。

私が展示のアドバイスを担当した日本館は、「水と共生する日本人〜知恵と技〜」をテ

エブロ川岸の会場とブリッジ・パビリオン

ーマとした。愛・地球博の理念「自然の叡智」を継承、先人から受け継ぎ、また今日も発展させている日本人の「知恵と技」を発信することが目的に掲げられた。三面のスクリーンを用いるアニメーションがメインショーである。木造船に乗って河童を案内人に現代のスペインから200年前にタイムスリップ、往時の日本人の生活を紹介する。舞台は、運河が縦横に市街をめぐる「水の都江戸」である。当時は使い古した紙や木、布を再利用、排泄物も肥料として活用した。資源を徹底的に使い切ったがゆえに河川は澄み、飲み水として利用された。いっぽうで洪水の際、わざと堤防の一画から水を溢れさせて威力を抑える備えも紹介する。200年も前に、すでに循環型社会を完成させていたことに来館者は驚いたのではないか。

会場風景。各国の出展がならぶ

ブリッジ・パビリオンの内部

7月21日からのジャパンウィークには、皇太子殿下が「水の論壇(ウォータートリビューン)」国際シンポジウムで「水との共存―人々の知恵と工夫」と題して講演。わが国独自の循環型の資源利用システムを紹介されるとともに「循環型社会」の構築をひろく呼びかけられた。浴衣姿のNPOの人たちが打ち水を実施、温暖化への効果をアピールしたほか、愛・地球博のマスコットであるモリゾーとキッコロが、サラゴサ博のキャラクターである水の妖精フルビと共演するミュージカルの上演もあった。

「水と持続可能な開発」という重要な主題を扱った世界博覧会であるにも拘わらず、サラゴサ博の詳細が日本ではほとんど報道されなかったことが残念でならない。北京五輪には誰もが注目したが、スペインでの万博に関しては、多くの日本人が無関心であった。

近年、実施された博覧会を振り返ると、世紀末のハノーバー博から、わが国の愛・地球博、そして今回のサラゴサ世界博覧会と、いずれも広義での「環境」が主題とされている。そもそも万国博覧会は、国境を越えた産業の一大見本市であり、各国の技術水準を提示する場でもある。その歴史を回顧すれば、19世紀には産業革命後の技術革新を告げる発明品や物産が話題となり、20世紀初頭には電気を主題とする展示館がもっとも人気を集めた。

博覧会場は、各時代を生きた人々が直面した課題と最先端の科学技術、産業技術による処方箋を提示する場であった。だとすれば今世紀の初頭にあって、「環境問題」、「持続可能性」が博覧会の主題となったのは、至極、当然のことだろう。いわば「小さな世界」である万国博覧会場に足を運ぶことで、各国政府や企業、NPOがこの種の問題といかに対峙し、解決に向けていかなる技術開発を進めてゆくのかを瞬時に学ぶことができる。その発想と問題意識は、「ベターリビング、ベターシティ」をうたい、都市問題を考えようとする2010年の上海世界博覧会にも、おのずと継承されるところだ。私たちは博覧会という国際イベントの果たしている役割と意義を、いまいちど再認識するべきではないか。 CEL

橋爪 紳也
(はしづめ・しんや)

大阪府立大学特別教授。1960年大阪市生まれ。84年京都大学工学部建築学科卒業、86年同大学大学院工学研究科修士課程修了、90年大阪大学大学院工学研究科博士課程修了。95年京都精華大学助教授、99年大阪市立大学助教授、2006年同大学都市研究プラザ教授、08年より現職。専門分野は建築史、都市文化論。工学博士。上海世界博覧会大阪出展プロデューサー。主な著書は、『あったかもしれない日本－幻の都市建築史』(紀伊国屋書店)、『モダニズムのニッポン』(角川書店)、『ゆく都市くる都市』(毎日新聞社)など。